OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2023年度 通年日本語11（ビジネス日本語・アカデミック日本語）実践報告
Author(s)	荒島, 和子
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 58-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95476
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2023 年度通年　日本語 11（ビジネス日本語・アカデミック日本語）実践報告

荒島 和子

1. はじめに

本稿では、2023 年度の「日本語 11」について報告する。この授業は 2 年生の学部留学生が受講する授業であり、受講生は 12 名で出身別には中国 9 名、台湾 2 名、韓国 1 名であった。春夏学期はビジネス日本語をテーマとし、日本での就職活動や日本企業で働く際に必要とされる基礎的な知識やマナー、日本語力を身につけることを目標とした。具体的にはエントリーシートの書き方や場面に応じた敬語表現などの日本語のスキルを身につけるとともに、就職活動における集団面接でのグループディスカッションやディベートのスキルを身につけることである。秋冬学期はアカデミック日本語をテーマに、卒業論文執筆に向けて専門分野の論文の批判的読解力を養うとともに、自身が興味のある分野について先行研究を調べ、研究計画を立て、研究計画書を作成することを目標とした。

2. 春夏学期の授業の概要

授業の概要は表 1 の通りである。初回の授業でアンケートを実施し、ビジネス日本語の学習経験や就業経験、就職活動の予定などについて質問した。学生達は全員 1 年次の授業でメールのマナーや敬語について学んでおり、大阪大学に入学する前の専門学校や短期大学でビジネス日本語を学んだ経験がある学生もいた。また、正社員として母国で就業した経験のある学生も 1 名だけいた。そして、ほぼ全員が日本でのアルバイト経験があるということで、日本語での履歴書の作成やアルバイトの面接の経験はあるということであった。日本での就職活動の予定については、数名の学生が大学院進学を目指しているようであるが、学部卒業後、または大学院修了後に日本で就職する予定の学生が多くいることがわかった。研究者や日本語教師の道へ進みたい学生もおり、全ての学生が日本で就職活動をするわけではないが、自己 PR や志望動機の書き方などの基本的な知識を身につけることは意義があると考える。さらに、日本の就職活動は学生達の母国における就職活動とは大きく異なり、独特なものである。独立行政法人日本学生支援機構 (2024) では、日本での就職活動経験がある留学生の約 3 割が就職活動の仕組みがわからずに困った経験があるとし、早い時期から就職活動全体の流れを理解し、必要な準備を始めることが大切であると述べている。そのため、本格的な就職活動が始まる 3 年次よりも前に日本の就職活動について学び、採用スケジュールを把握しておくことは、日本での就職を希望する学生にとって重要なことであると考える。

表 1　授業概要（春夏学期）

回	授業内容
1	オリエンテーション、アンケート 留学生の就職事情
2	就職活動の流れ、面接での自己紹介
3	エントリーシートとは・自己 PR
4-5	自己 PR、ビジネス日本語・敬語表現
6	自己 PR、志望動機
7	志望動機、メールのマナー
8-10	課題解決型グループディスカッション
11	課題解決型グループディスカッション ディベート型ディスカッション
12-14	ディベート型ディスカッション
15	ディベート型ディスカッション 総括、授業評価アンケート

授業では、まず、留学生の日本における就職事情について説明し、就職活動の流れを紹介した。就職活動をする予定がある学生でも、就活支援サイトをチェックするというような行動を実際に起こしている学生はいなかった。そのため、早い段階からインターンシップのことを考え、自己分析や企業分析を行う必要があることを知って驚く学生もいた。

就職活動の概要やスケジュールを理解した後、春夏学期の前半部分は就職活動で必須となるエントリーシートの書き方を中心に取り上げた。エントリーシートには自己 PR、志望動機、学生時代に力を入れたこと等のテーマで作文が課されるが、このクラス

では自己 PR と志望動機に焦点を絞った。

自己 PR をするためには自分の強み、長所を見つける必要がある。そのため、まずは自分史を作成し、自己分析をするところから始めた。その後、自己 PR の構成や例、書く時のポイントを提示してから、課題として提出させた。大阪大学に入学するために努力したことと絡めてアピールする学生が多かったが、それ以外には、大学でのサークルを立ち上げた経験や中国語の SNS の運営、英語の資格試験等を通して得た経験に基づいて決断力や行動力をアピールする学生もいた。各自が書いた自己 PR を名前を伏せてクラスで共有し、どの自己 PR がいいかを選んでもらった。また、ペアやグループで互いの自己 PR を推敲する活動も取り入れた。学生からは、大学受験で合格したことや英語の資格試験で好成績を収めたことは皆が通過した道であり特別なことではないため、アピールにならないという意見もあった。しかし、経験したことは同じでも、その時にどのように考え、どのように行動したのかは人によって異なるため、アピールになるのではないかと考える。

次の志望動機を書くためには自分が就職を希望する業界や企業、職種を絞る必要がある。しかし、就職活動までに時間的余裕のある 2 年生の学生にとっては、漠然とした考えしかないようで、就職を希望する企業も決まっていない人がほとんどである。また、クラスには一般企業への就職ではなく大学院進学を希望する学生もいる。そのため、ここでは就職の希望がある学生は希望する企業を一つ選び、まだ決まっていない学生や進学希望の学生は自分でどこかの企業に応募すると仮定して、その企業に向けての志望動機を書くこととした。また、志望動機を書くためには業界分析や企業分析も重要となるが、時間的に余裕がないため、その企業が求める人物像を企業のホームページなどで調べて書くこととした。そして、課題として提出し、その後は自己 PR と同様に、各自が書いた志望動機を名前を伏せてクラスで共有し、どれがいいかを選んでもらった。

就職活動では、特に面接の段階になると、採用担当者とのメールのやり取りが必要となるため、就職活動におけるメールのマナーや敬語表現も取り上げた。先に述べた通り、学生達は 1 年次の授業で基本的なメールのマナーや敬語については学んでいるが、忘れてしまっていることも多いようであった。また、「拝受しました」や「ご査収ください」のようなビジネス表現については初めて知る表現も多かったようである。メールでは採用担当者とのやり取りの中で起こり得る状況として、「面接日の変更のお願い」を取り上げ、実際にメールを書いて筆者に送らせた。基本的なマナーや表現を教えた上で書かせたので、提出されたメールには大きな問題はなかった。

春夏学期の後半は面接でのグループディスカッションに取り組んだ。グループディスカッションには、正解のない問題について自由に討論するタイプの「自由討論型」や現状の課題解決のための最善策を議論するタイプの「課題解決型」、是か非か、A か B かのように二つの立場に分かれて議論するタイプの「ディベート型」などがあるが、クラスでは「課題解決型」と「ディベート型」の 2 つを扱った。ディスカッションについてはこれまでの日本語の授業でも経験があるであろうし、実際のコミュニケーションの中でも、話し合いによって一つの結論へ導いた経験は誰しもあるはずである。しかし、面接におけるグループディスカッションでは、チームや議論に貢献できる力や説得力があるかどうかが評価される。そして、その中でコミュニケーション力や協調性、論理的思考力を発揮しなければならないため、苦手意識を持つ大学生も多くいるようである。

授業では、まず課題解決型のグループディスカッションについての説明の後、YouTube で公開されている模擬グループディスカッションを視聴した。役割分担をし、時間配分を決め、議論の途中でも意見やアイデアを都度まとめるというような流れを実際に見ることで、グループディスカッションの雰囲気や進行が理解しやすくなったように思う。次に、クラスを 2 つのグループに分け、グループ①のディスカッションをグループ②が観察し、評価するという形で進めた。テーマもグループ①は「新入社員の早期離職を防ぐにはどうすればいいか」、グループ②は「ＡＩに代替されないためにはどんな能力を身につけたらいいか」というように、別々のテーマとした。グループのメンバー変えて、違うテーマでもディスカッションを行い、各学生が 2 回ずつディスカッションをした。そして、毎回ディスカッションの後には評価と振り返りの時間を持った。

各回とも役割分担や時間配分はスムーズに行えたが、発言者が偏ってしまったり司会者がその役割を果たせていなかったりすることもあった。また、「ＡＩに代替されないためにはどんな能力を身につけた

らいいか」というテーマでは、ＡＩができない仕事を考えるところから議論が始まり、最後までその観点からの議論に終始し、テーマであるどんな能力を身につけるべきかについての議論をしないまま終わってしまった。論点がずれていることに誰も気付かず、軌道修正をすることができなかったため、ディスカッションとしては失敗であったが、学生達は常にテーマを確認することの大切さを痛感したようである。また、テーマに関する知識も不足しており、漠然とした議論で終わってしまった感もあった。そのため、普段から時事問題や社会問題にアンテナを張り、自分の意見を持つことの重要性を感じたようである。

ディベート型ディスカッションは、クラスを 2 つのチームに分け、①「外見と性格はどちらが大切か」と②「日本でサマータイムを導入すべきか」という 2 つのテーマで行った。①は異なる価値観を比べる論題なので事前準備なしで行い、ジャッジは置かずに、どちらのチームの意見に説得力があったかを参加者である学生自身で判断し、最終的な結論を出すことにした。全員意見を述べることができていたが、前の発言内容と関連付けて意見を述べることができず、単に自分の考えを言うだけに留まっていることもあった。また、調査の結果を引用して、根拠のある主張ができた学生もいたが、全体的には説得力のある意見は少なかったように感じた。②は①とやり方を変え、チームで事前準備をしてから試合を行い、筆者と準備日に授業を欠席した学生の 2 人でジャッジした。本物のディベートのように「立論」「尋問」「反駁」「総括」の役割分担もした。「立論」は肯定側も否定側もしっかり準備されており、論点も明確で客観的な証拠も提示できていた。しかし、両チームとも「尋問」やそれに対する「応答」「反駁」では客観的な証拠を提示できず、明らかに準備不足であり、チーム内のコミュニケーションも不足していたように思う。

3. 秋冬学期の授業の概要

授業の概要は表 2 の通りである。秋冬学期の前半部分は、卒業論文の執筆に向けて批判的読解力を養うことを目標に、日本語教育学、日本語学、日本文化学など様々な分野の論文を講読した。初回の授業では論文の読み方について説明し、次の授業で筆者が選んだ論文を読み、ディスカッションを行った。3 回目の授業以降は毎回の担当者を決め、その担当者が興味のある文献を自分で探し、授業の進行役も務めることとした。他の学生には CLE 上で共有された論文を読み、授業前日までに予習シートを提出することを課した。また、論文は一定の質を保証するために、査読付きの「学会誌」「研究会誌」に掲載された研究論文、実践報告、調査報告から選ぶこととした。担当者はその論文の内容を自分で発表するのではなく、司会として授業を進行し、論文の内容を他の学生に確認したり疑問点を指摘したりして、議論を深める役割を担った。学生達が選んだ論文はテーマも様々でどれも興味深い内容であった。ただ、インターネットで検索し、原文をダウンロードできるものばかりが選ばれていたのは少し残念だった。論文の探し方については初回の授業でも説明し、大学の図書館には学会誌や研究誌の最新号が置いてあるということも伝えたが、実際に実物を手にとって論文を探した者がどれほどいたであろうか。卒業論文を書く際は「インターネットで手に入らないから読まない」ということがないよう、文献検索の大切さも伝えていきたいと思う。

表 2　授業概要（秋冬学期）

回	授業内容
1	オリエンテーション、論文の読み方
2	論文の批判的講読（筆者選定の論文）
3-8	論文の批判的講読（学生選定の論文）
9	研究計画の立て方
10-14	研究計画の発表
15	研究計画の発表、総括、授業評価アンケート

秋冬学期の後半部分は、卒業論文を念頭に置いた研究テーマを各自で設定し、研究計画を立て、発表することとした。また、最終的には研究計画書を作成し、期末課題として提出することとした。前半部分の論文講読と同様に、研究分野やテーマが明確に決まっていない学生も多かった。そのため、研究計画が甘く、深く掘り下げることができていない学生もいた。また、卒業論文のテーマはまだ決められないので、今回だけの課題として研究テーマを考えたという学生もおり、早い段階から卒業論文について考え、アイデアを蓄えていくことが大切だと感じた。

4. 学生の反応と今後の課題

ここからは授業評価アンケートの結果に基づいて学生からの反応と今後の課題について述べる。

まず春夏学期の授業に関しては、「日本での就職活動の基本的な知識を得て、必要な準備を知ることができた」という意見が多かった。内々定があることや面接でグループディスカッションを行うことを知らない学生もいたので、全体としては今後に役立つ授業内容になったかと思う。

また、「ディベートはやったことがなかったが面白かった」「さらに興味を持った」という意見があった一方で、「論題がやりづらかった」「争いごとが嫌いな性格なのでディベートは苦手だ」という声もあった。論題については就職活動のディベート型ディスカッションで頻出とされるテーマからいくつかの候補を挙げ、その中から学生に選んでもらおうと考えたが、意見が分かれたため、最終的にはくじ引きで決定した。テーマによって議論のしやすさも変わるためテーマ選びは重要となるが、どのような論題であっても論理的で説得力のある意見が提示できるように、普段から論理的思考力を鍛えることも重要であろう。

秋冬学期の授業に関しては、「論文の構成や読み方、研究計画の立て方が理解できた」という意見が多く見られた。また、「これまで読んだことのない分野の論文を読んだことで新たな分野に興味を持つようになった」という意見も多かった。どの分野で卒業論文を書くか未定の学生もいたが、様々な論文を読むことで、様々な専門分野や研究テーマがあることを知り、自身の興味を広げるいい機会になったように思う。しかし、選んだ論文の内容をしっかり理解した上で進行できていた担当者もいれば、内容理解が不十分なまま進行する担当者もいた。今回は査読付きの論文を選定基準にしたため、難解な論文が多く、学生にとっては難しかったかもしれない。しかし、卒業論文を書く上では様々な文献を批判的に読む力が必要とされるため、難易度の高い専門的な論文も読めるように、今後さらに読解力を高めてほしいと思う。

また、研究計画の発表については、質問したり意見を出したりする学生が偏っており、学生間での意見交換が少なかったことが残念な点として挙がっていた。今後は有意義な意見交換ができるように授業の進行も改善していきたいと思う。前半部分の論文講読で選んだ論文と関連のある研究計画を期待していたが、選んだ論文とは全く違う分野、テーマで研究計画を立てる学生が多かった。様々な論文を読み興味が広がった結果かもしれないが、研究計画の「先行研究」の部分で取り上げる論文を前半の論文講読の授業で選ぶという意識付けが足りなかったことも一因であると考えられる。今後は、前半部分と後半部分のつながりを意識できるような授業づくりを考えていきたい。

【参考文献】

株式会社ディスコ（2024）『外国人留学生／高度外国人材の採用に関する調査（2023年12月調査）』https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2024/01/202312_kigyou-global-report.pdf（2024.02.01最終閲覧）

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）（2024）『外国人留学生のための就職ガイド2025』https://www.jasso.go.jp/ryugaku/after_study_j/job/__icsFiles/afieldfile/2023/11/20/guide_2025_all.pdf（2024.02.01最終閲覧）